

事業報告書（令和2年度）

事業名 「世界の宝石―瀬戸内海」を磨く～海底探検隊2020

団体名 特定非営利活動法人グリーンパートナーおかやま 担当者名 金谷啓紀

※活動の様子がわかる写真（データもお願いします）と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

【日時】令和2年12月6日（日）9時30分～16時30分

【場所】 倉敷市下津井沖

下津井漁業組合会議室及びむかし下津井回船問屋

【主催】 NPO 法人グリーンパートナーおかやま

【参加者】50名

【海底探検隊】

底曳網漁船 2隻（3隻のうち1隻は当日トラブルのため出向できず）参加者数名が底曳網漁船に乗り込み、船内から引き上げの様子を見学体験

遊覧船 1隻 残りの参加者は遊覧船から見学した。

当日は波が高く、潮が悪かったため、底引き網が十分海底に届かなかった。

海底ごみは今回は潮の影響でほとんど回収できなかった。

その後下津井漁業組合会議室で開会式を行った。

【開会式】

来賓あいさつ 環境省中国四国岡山地方環境事務所長 上田健二

【基調講演】

「海ごみと私たちの暮らし ～海ごみ問題をきっかけに、SDGsの実現に向けてライフスタイル・社会の在り方を見直そう～」

飯野 暁（環境省水・大気環境局 海洋環境室・海洋プラスチック汚染対策室長補佐）

【講演】

環境省の若干職員の方々から海ごみ、プラスチック問題についてわかりやすい抗議をしていただいた。

迫山貞充（環境省水・大気環境局 海洋環境室・海洋プラスチック汚染対策室長補佐）

安倍達哉（環境省水・大気環境局 海洋環境室・海洋プラスチック汚染対策室長補佐）

鎌倉真奈（環境省水・大気環境局 海洋環境室・海洋プラスチック汚染対策室）

藤本 諒（環境省水・大気環境局 海洋環境室・環境専門調査官）

【ワークショップ】

7班に分かれ、瀬戸内海の在り方等についてワークショップを行った。

【下津井の歴史紹介】

むかし下津井回船問屋の見学と堂下和紀館長の説明があった。

<p>2. ESD の視点を取り入れたところ、ESD の視点で見直したところ</p> <p>海ごみ、特に海底ごみは日常見えないごみであること、そしてそれが認識できていないということにある。コロナ禍で参加人員は少なく、潮の関係でごみの回収は少なかったが、ESD の視点で取り入れたのは、教育と持続可能である。漁業者のごみに対する困惑と参加者の意識の浅さについては、講義により参加者の理解はより深まったと考える。ESD の視点では継続していくこと、今までも続けていたけれども、もっと広く啓発していくことを、若い人中心に啓発していくというように見直しているところである。海ごみは生活ごみだ、私たちはこれを作り出している当事者だということを「持続可能に学んでいく」ように見直した。</p>
<p>3. 取組の成果（参加者にどのような意識や行動の教育上の成果があったか。感想など）</p> <p>今回の活動で、海底ごみが簡単に回収できないこと、それが講義などにより、ほとんどが生活ごみから発生していることが理解できたと思う。ワークショップなど参加型の取り組みを通じて、ごみを出さないという意識が芽生え、地球を汚さないという使命感を感じていただいた。講師自体も若い人でワークショップは発言も多く、人気だった。参加者の人数には限度があったが、これが種々の人々につながり広めていくという啓発事業の先駆けとなったことが成果である。</p> <p>この啓発活動を今後さらに発展していくことが私たちの使命であるとあらためて認識した。</p>
<p>4. 今後の課題と展望</p> <p>【課題】</p> <p>持続可能な活動としていくためには、参加者だけでなく一般の人々の意識改革、行政やマスコミなどの支援が必要です。意識を持っていない人にいかに意識づけるか、そのためには若い人、小中学生と連携し、大人、老人をも取り込む活動にシフトしていかなければと考えている。マイクロプラスチック問題は「待ったなし」だと認識させ、多くの人に危機感を持たせるような活動をしていくことが今後の課題である。</p> <p>【展望】</p> <p>10 年余り、岡山中、あるいは全国でも先頭を切ってごみ問題で活動してきた。多くの団体がそれに倣って始めているが、調査だけとかただごみをひろうだけとどまっている団体が多い。海ごみ、突き詰めれば川ごみですが、これをなくす意識改革を多くの若い人たちや小中学校と連携し、大きなうねりを作っていきたい。そうなることを望んでいる。</p>